

兄弟仲の良し悪し

特定非営利活動法人東日本保育研究会

○はじめに

当法人の事業の柱である育児相談には、様々な質問や相談が寄せられますが、毎年必ず、「兄弟間でとても仲が悪く、ケンカばかりしているのだがどうしたらよいだろうか」という内容の質問があります。

これまでの相談における兄弟の年齢は、上の子は3才で下の子は1才程度の低い年齢のものから、上の子が10才で下の子が7才程度の比較的高い年齢までありました。

ここでは、総論としての考察を試み、兄弟仲を良好に導く考え方を探ってみました。

○「保護愛」から「兄弟愛」へ

まず、子どもが自分より小さい子を意識しだすのはいつ頃からでしょうか。保育園の0才児の保育室を観察してみるとわかりますが、早ければ生後10ヶ月頃になると、生後4～5ヶ月までの赤ちゃんを可愛がる仕草を見せ始めます。もちろん個人差もありますが、総体的には、伝い歩きが自由にできるようになってくると、まだ寝返りもできない赤ちゃんを、「自分より小さい子」として認識を始めるようです。

このことは、兄弟仲を考察するのに、非常に重要な項目です。兄弟であるならば、どんなに年齢が近くても、上の子は11ヶ月以上の月齢に達しているからです。10ヶ月程度でも自分より小さい子と認識できるということは、誰もが兄弟が生まれて我が家にやってきた時点で、自分より小さい子がいるとわかるのです。

では、「自分より小さい子」に対して、どのような気持ちを抱いているのでしょうか。ここからは、下記の例における年齢の兄弟のケースで考えてみます。

例：上の子が3才男児、下の子が1才男児

下に兄弟が生まれたとき、上の子は2才です。

2才頃では、下の子がまだ赤ちゃんのうち、「自分より弱い存在」という認識です。自分よりも体が小さく、泣くだけで、自力では動けないのですから、「自分＝強い、赤ちゃん＝弱い」という力関係で認識するのは、幼児の思考としては当然のものといえるでしょう。

赤ちゃんが自分より弱い存在であるという認識は、「保護愛」を育み、ミルクを飲ませる手伝いや、寝かしつけなど、世話をする欲求を生みます。赤ちゃんの頭や顔をなでる（なでる技術が伴わない場合は掴む）こともしますが、「可愛い」という意識は強くなく、保護的欲求からです。

下の子がお座り、ハイハイなどができるようになると、上の子が抱く認識は変化してきます。「赤ちゃん＝弱い、ではないのではないか」と気づき始めるのです。下の子が伝い歩きを始め、上の子と同じおもちゃで遊べるようになると、下の子は上の子の思い通りの反応を返してくれなくなります。この時は、上の子は3才、下の子は1才になった頃です。

具体的には、おもちゃを貸してあげたとき、喜んでもらえるかと思っただけでいらぬをされた、というのが代表的なものです。これは下の子が自我とおもちゃによる学習の両方を獲得中であるためです。しかし、上の子は、その理論を知る由もありませんので、想定外の反応をなされるうちに、「保護愛」は急速に薄れていきます。

「保護愛」が薄れていくに従って、上の子は下の子をいじめるようになります。しかし、いじめの期間は長くありません。数日で終了することもあります。いじめの期間が短いのは、上の子が「力でいうことをきかせる（自分が思っている反応をさせる）」ことを、すぐに学習するからです。「赤ちゃん＝弱い」は崩れても、「自分＝強い」は依然として確固たる認識のままなのです（いじめと兄弟ゲンカは、大人の目には同じに見ることがありますが、まったくの別物です）。

最初の兄弟ゲンカはこの時期から始まります。

しかし、もちろん四六時中兄弟ゲンカをしているわけではありません。嗜好が合えば仲良く一緒に遊びますし、なんといっても一緒に生活しているのですから、互いに感化しあい、相手が何を好んで、何をすると喜び、または嫌がるかを正確に把握できています。

ケンカをするときは、下の子が何をされると嫌なのかを衝いて行動しますが、仲良くしたいときは、どうすれば喜ばれるかを考えて行動します。判断はまず正確ですから、下の子の喜びもストレートに伝わってきます。

下の子に喜ばれると、上の子は嬉しさを感じます。この嬉しさは、自己満足の域を出ないこともままありますが、嬉しさが土台となって「兄弟愛」が徐々に育まれていくのです。

以後10年以上の期間を費やして、「兄弟愛」は着々と確たるものになります。その間、兄弟ともに「相手のために何かをする」「相手を守りたい」など、奉仕と自己犠牲の精神を獲得し、「兄弟愛」の一般的な姿が完成します。

○兄弟仲が悪い状態が続く理由

「保護愛」が薄れた状態から変化がないためと考えられます。「保護愛」が薄い状態が長く続くと、兄弟がお互いのことを思い遣らず、お互いの利害で関わろうとするため、「兄弟愛」を育むための関わりを持たず確立させることができません。年齢を重ねれば、個々の利害も多様化していくので、兄弟がそれぞれ、自分の利害を優先させることが多くなり、兄弟仲は悪いままから次第に悪化していきます。

上の子が就学前くらいまでなら、利害が単純なので、叱るだけで兄弟ゲンカを止めることはできます。しかし、「ケンカしてダメ」「お兄ちゃん（お姉ちゃん）なんだから我慢しなさい」だけでは、兄弟仲を良好に導く役には立ちません。叱るよりも、「兄弟愛」を育む土壌作りから始めなければなりません。

○「兄弟愛」を育むためには

兄弟仲を良好なものにするためには、「保護愛」から「兄弟愛」へのスムーズな移行が理想的です。そのためには、「保護愛」が弱くなる時期から、「兄弟愛」を育めるような、兄弟同士のかかわりを意図して多く持たせる必要があります。どのような関わりが良いかは、家庭環境、親の接し方の方向性、祖父母の有無など、個々の事情に合わせて考えなければなりません。もっとも影響を与えるのは、親の接し方です。

上の子と下の子とで接し方がまるで違ったり、上の子の見ている目の前で下の子を可愛がり上の子へのフォローがない、という接し方は、上の子が下の子に対して「可愛い」という認識を持つことが難しくなります。特に「保護愛」が薄れてきた時期にこのようなことがあると、成長してからも心の隅に下の子に対する嫉妬心が根強く残る傾向があります。

「兄弟愛」を育むためには、下の子に対して「可愛い」という気持ちを持たせることが大切です。兎際の育児としては、下の子を「可愛い」と思えなくなるようなシチュエーションを作らないことが肝要となります。それゆえ、「弱い」から「可愛い」に認識を変えてあげることが、親の責務となると言えるでしょう。